



## 2年間の編集作業を振り返って： 著者の皆様にお伝えしたいこと

奥宮 敏可\*

〔Key Words〕 編集委員会、編集委員、投稿原稿、依頼原稿、著者、査読者

### はじめに

「寄稿」というと、通常は長きにわたり教育・研究活動を続けてこられた先輩諸氏が、定年前に過去を振り返りご自分が経験された様々なことを総括し、主に若手教員のためにアドバイスや自分が極められた教育哲学を伝えるためのものや、何かに非常に造詣の深い著者がそれを読者に平易な言葉で伝えるもの等と理解している。私の定年はまだまだ先のことであるし、ましてや教育哲学も究めてないし、特に造詣が深い趣味等もない。今回は、過去2年間、私が編集委員長として「臨床検査学教育」誌(以下、本誌)の編集に携わってきた者として、何か感じたことや気が付いたことを著者(会員)の方々に伝えてほしいとの依頼により執筆したものである。依頼されたのは平成27年度から新理事として編集委員長に就任された松尾収二先生(天理医療大学)と、同じく新理事として副委員長に就任された嶋田かをる先生(熊本保健科学大学)である。若輩の私が「寄稿」の執筆(?)とは思ったが、委員長と副委員長からのご指名ということもあり、筆をとることとした次第である。内容は、平成25年度8月、本誌の編集委員長を拝命した時から、松尾委員長と嶋田副委員長に本会務

のバトンをお渡しするまでの話である。編集に関して素人で浅学非才な私ではあるが、他の委員の先生方のお力を借りながら直面した様々な問題にどのように対処して2年間の責務を乗り切ったのか、軽く読み流して頂ければ幸いである。

### I. 揺籃期から激動期へ

平成25年度から日本臨床検査学教育協議会(以下、協議会)の改組が行われ、これまで長きにわたり協議会を牽引し、会の発展に大きく貢献された前理事長の三村邦裕先生(千葉科学大学)に代わり、戸塚 実先生(東京医科歯科大学)が新理事長に就任された。その年度より、私も理事の一人として、協議会の運営に関わることとなった。理事は原則として、必ず各種委員会・部会の委員長(副委員長)あるいは部会長を務めることとなっている。平成25年5月の理事会で正式に理事として委嘱された私は、同年8月の理事会資料で自分が本誌の編集委員長に指名されていることを初めて知った。本誌が初めて刊行されたのは平成21年3月1日で、補冊を除けば、これまで年間2回(1号が3月1日、2号が9月1日)の発行が定期的に行われてきた。

初代編集委員長は岩谷良則先生(大阪大学)であった。その当時に基本的な投稿規程や執筆要領が

\*熊本大学大学院生命科学研究部生体情報解析学分野 okumiyat@kumamoto-u.ac.jp (前 編集委員会委員長)

作成されており、岩谷先生は初版刊行までに随分とご苦労されたであろうことは容易に推察できた。

第2代目の編集委員長は森山隆則先生(北海道大学)で、岩谷先生が礎を築かれた雑誌の編集を引き継がれ、2年間の任期中に本誌の継続的な刊行にご尽力され、その重責を立派に果たされた。

第3代目の編集委員長を拝命した私は、雑誌編集に関しては全くの素人と言わざるを得なかった。投稿された原稿がどのようなプロセスを経て査読・編集され雑誌掲載までに至るのか、また、その過程でどのような人達がどのような作業を行っているのか考えたこともなかった。そのような状況ゆえに、何から始めたらいいか全くのノーアイデア・ノープランであった。そこで生来楽天的な私は、取り敢えず前編集委員長の森山先生に連絡してご指示を仰げば何とかかなと思ひ、縋る想いで森山先生にお電話した。森山先生からは、「それは大変ご苦労様ですね。先生のやりたいようにおやりになればよろしいですよ」とのご回答であった。その時、初めて自分に課せられた責務の重さを痛感するとともに、富士の樹海の中で一人ぼっちで佇む自分の姿が脳裏に浮かんだ。

取り敢えず情報収集から始めようと思った私は、本誌の雑誌構成業務が委託されている宇宙堂八木書店の超ベテラン編集者で、臨床検査の専門知識にも造詣が深い田中健治氏にお電話し、これまでの本誌の編集の流れ等について説明を受けることとした。その際に、田中氏の口から出た言葉は、「多分、森山先生だったら、こんな時はこうなさるでしょうねー！」等々、当時の私は、半分傷ついた我が身が更に奈落に突き落ちていくような思いが心の底から沸いてくるのを抑えることはできなかった。ただ、ここで田中氏の名誉のために言っておかねばならないが、この2年間一番親身になって私をサポートして下さったのは、他の編集委員の先生方と同様に田中氏であることは紛れもない事実である。田中氏の助言なくして2年間の編集委員長としての責務は果たせなかったであろうことは自明の理である。私は、やっと「どうせ課せられた責務なら自分流のやり方でやってみようじゃないか」と腹が据わった。

## II. 千里の道も一歩から

やっとなる気になった私は、先ずは一緒に編集作業を進めて頂く編集委員の人選をすることとした。そこで、過去の編集委員会の構成メンバーの所属と氏名を確認した。構成メンバーは国立4年制大学を中心に公立・私立大学の教授で、なおかつ各専門分野で知名度がある先生方の名前が並んでいた。私は単純に不思議に思った。夏の日本臨床検査学教育学会(以下、教育学会)学術大会では学生教育の改革や新規教育方略の実践等に関して熱心に発表されているのは、4年制大学だけでなく多くの3年制の専門学校や短期大学の先生方である。それにも拘らず3年制の教育施設の先生が一人も編集委員でないことを非常に奇異に感じた。そこで編集委員会は私も含めて6名とし、その中の2名の委員は3年制の教育施設から人選することとした。

その結果、担当副理事長の奥村伸生先生(信州大学)とも相談のうえで、私を除く編集委員(五十音順)としては、井上聡子先生(東洋公衆衛生学院)、今井正先生(香川県立保健医療大学)、高岡榮二先生(高知学園短期大学)、山内一由先生(筑波大学)、渡邊幹夫先生(大阪大学)にお願いすることとした。諸般の理由により平成26年度からは井上先生に代わり石橋佳朋先生(東武医学技術専門学校)に加わって頂いた。また、徹力な私を助けて頂くため渡邊先生には副編集委員長をお願いした。これでようやく組織は出来上がった。

当時の私には、次にやらなければならない大切な仕事があった。それは、各委員が編集プロセスを共に理解し、誰がどのタイミングで何をどのように行うべきかを熟知したうえで、それを粛々と効率的に進めていくための作業工程書の作成である。先ずは、思いつくままに具体的な編集作業の概要を紙に書いてみた。それを更にブラッシュアップし、誰でも分るようにフローチャートとした(図1,2)。この作業工程のフローチャートは、実際の編集作業を行う過程で他の編集委員の助言やコメントをもとに何度も改定していった。また、この作業工程書をもとに、各ステップで必要とな

A. 著者からの自由投稿の場合(投稿のお願いをしたものも含む)

Ver. 2015/7/14

著者に対して電話で投稿のお願いをして承諾を得る場合

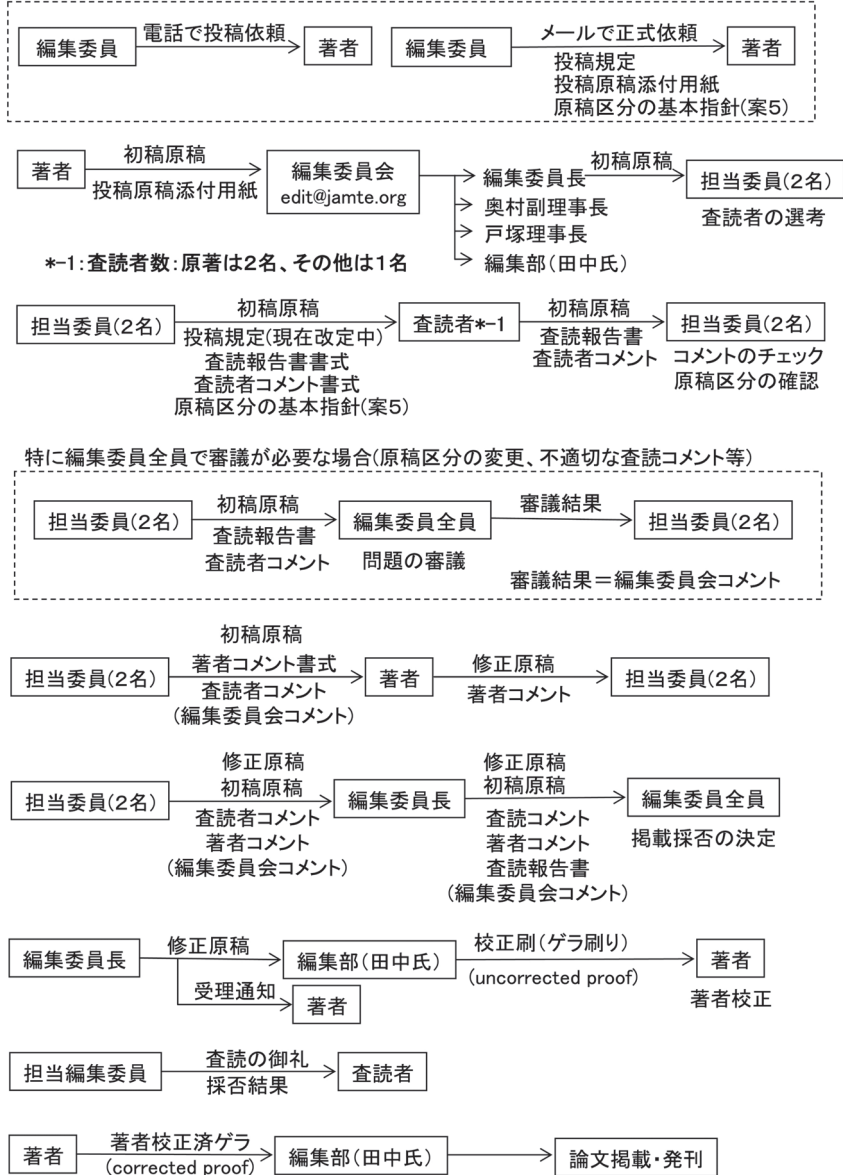
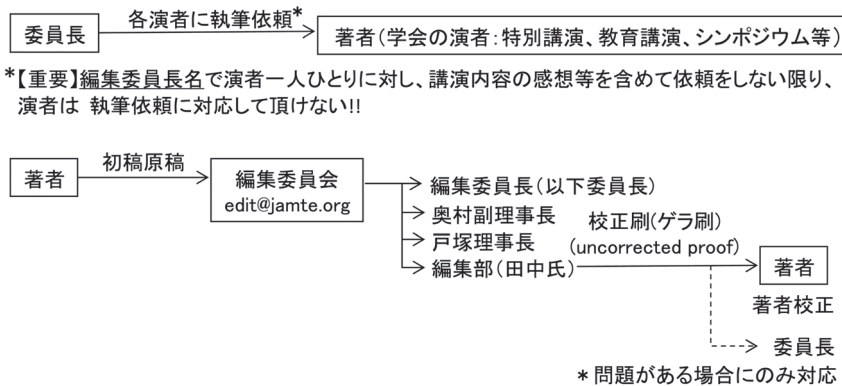


図1 投稿原稿の編集フローチャート

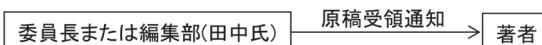
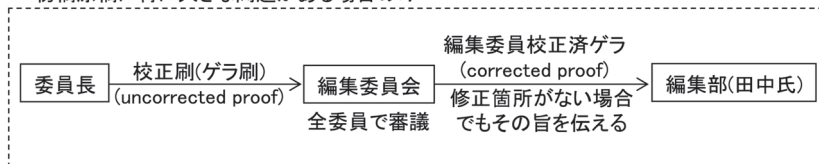
担当委員(2名)となっているが、事実上はその2名の編集委員の中で担当著者を決め編集作業を進めて頂いた。これにより不明な点などは相互確認しながら作業を進めることができた。

## B. 編集委員会からの依頼原稿(学会特集号や総説など)

Ver. 2015/7/17



\* 初稿原稿に特に大きな問題がある場合のみ



\*委員長が特定の著者に総説等を直接依頼した場合→委員長が受領通知と御礼を出す  
学会特集号等で、委員長が、演者に対して個別に執筆依頼のメールを配信した場合など  
→編集部(田中氏)が受領通知を出す



図2 依頼原稿の編集フローチャート

学会の特別講演や教育講演、シンポジウムの演者に対して執筆依頼を行う場合は、編集委員長名で講演内容に関する感想なども入れて一人ひとりに心のこもった依頼文をお送りするように心掛けた。

る各種書式のテンプレート文章も全て作成した(図3)。この編集作業フローチャートの流れに沿って各ステップで専用テンプレート文章を用いて、各編集委員により編集作業は進められた。また、投稿原稿以外の関連学会報告や研究室/学校紹介、研究紹介、書評などの執筆依頼は、各編集委員で分担して行うこととした。

### III. 第5巻2号(9月1日発刊予定)は どうする?

私が編集委員長を拝命したのが8月の下旬で、その時点で9月1日発刊予定の第5巻2号の編集が急務であることは、鉛のような重圧となって私の胸を圧迫していた。このような状況のため、編集委員の人選と第5巻2号の執筆依頼は私一人で平行して行わざるを得なかった。

その時、私の頭に1つの戦略が浮かんだ。それ

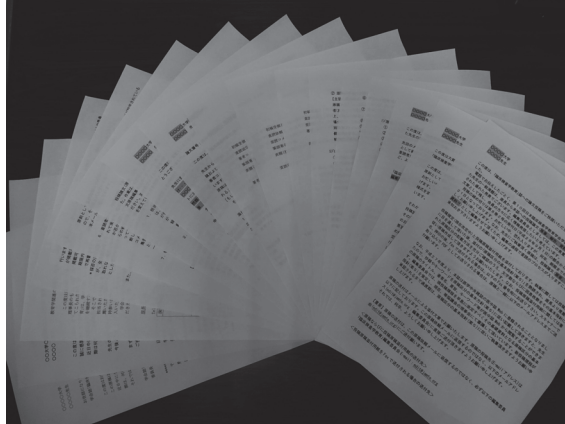


図3 編集作業に使用したテンプレート文章

これらのテンプレート文章を全編集委員の方々にメール添付で配信した。テンプレート文章は、図1の編集フローチャートに従い、各作業ステップで使用する専用文章として使用して頂いた。委員長から委員への作業依頼書や最終審査の依頼状や著者への審査結果の報告書等を合わせると、恐らく50種類以上になると思われるが、ここに示したのは、その一部である。

は、その夏の教育学会の研修委員会主催のシンポジウム「教育現場における心のケア」を主軸に第5巻2号を編集することであった。私はその時、シンポジウムの司会進行を担当し、3名の精神・神経科領域の専門医の先生方にシンポジストとして学生を中心とした心のケアの現状と今後の展望に関して講演して頂いた。質疑応答では活発な意見交換が行われ、臨床検査教育施設においても多くの教員が学生の心のケアに関して苦慮していることが浮き彫りとなった。私は、直ぐにシンポジストの先生方に電話とメールで執筆依頼をした。当初は、多忙を理由に執筆を辞退された先生もおられたが、不思議なことに他の先生方がご執筆されるとのメールがC.C.で送信されると、当初辞退された先生からも原稿を頂くことができた。私はこの経験を通して何となく執筆者の心理が理解できたような気がした。

また、シンポジウムの原稿だけでは不十分なので、シリーズ物で総説を連載することを考えた。その理由は、多くの教員が心のケアを含めた学生の健康管理に苦慮していることを痛感したからである。連載する総説のタイトルは「教育現場における健康管理」とし、第1回目の著者は熊本大学の保健センターの2名の先生にお願いした。その

後もこのシリーズ総説は、大阪大学、筑波大学、東武医学技術専門学校、中部大学と各号の巻頭に連載することができた。

ところで、第5巻2号には特別な使命があった。それは、平成25年度の協議会改組による新執行部の体制を会員の皆様にお知らせすることである。そこで、まずは戸塚理事長に所信表明の執筆をお願いした。それと同時に、全ての委員会委員長と部会長に会務の概要に関して原稿執筆を依頼した。私同様、他の委員長・部会長も同年8月に就任されたばかりであったが、皆様のご理解とご協力により、全ての委員会・部会から原稿を頂くことができ、協議会改組による新体制について会員の皆様に情報発信することができた。

#### IV. 学会での演者への執筆依頼と次々号の誌面充実のための方策

第5巻2号の原稿依頼を行いながら、私は、次号の第6巻1号(平成26年3月1日発刊予定)ではなく、次々号の第6巻2号(平成26年9月1日発刊予定)の誌面を充実させるための方策を思案していた。過去の本誌の原稿構成を見ても3月1日号(次号)は前年度の学会特集となっており、次号の原稿としては夏の教育学会の特別講演や教育講

演、シンポジウムだけで充分であり、その依頼は学会終了以降に行っても充分間に合うと考えたからである。それよりも、著者の自由意志により投稿される投稿原稿(原著、報告、資料、主張など)は2~4編/年程度であり、本誌の本来の目的が十分に履行されていないことに強い危機感を抱いていた。会員の皆様からの投稿原稿があつてこそ、編集委員会の存在意義もあると思った。とはいえ確かに内容が臨床検査技師の教育に特化したものであるので、投稿論文が少ないことはある程度予想できた。しかし、毎年夏の教育学会では、20~30程度の教育関連の一般演題が発表されているのに、なぜそれらが本誌に投稿されないのか以前から不思議に思っていた。

そこで、第8回の教育学会で教育関係のセッション担当の座長の先生方に、担当演題の中から本誌に投稿すべき演題を推薦して頂くことを考えた。そこで急いで推薦書式等の必要な書類を作成し、企画意図とともに大会長の岩谷先生(大阪大学)にお送りした。岩谷先生からは直ぐにご承諾の返信が返され、事務局長が副編集委員長の渡邊先生でもあつたので、座長推薦演題の企画は直ぐに実現し、学会開催前に担当座長の先生方に企画の趣旨と推薦書式をお送りすることができた。

第6巻2号のための「種まき」を終えた私は、第6巻1号のために執筆者への依頼作業を始めることとした。第6巻1号は前年の教育学会の講演(第5巻2号に掲載した教員研修会を除く)を主軸に編纂することとした。そこで、先ずは編集委員長名で、各演者に対して講演の内容にも触れ私の個人的感想も添えた執筆依頼を一人ひとりにメール配信した。演者に対して同じ文面を一斉送信することも可能であつたが、それは敢えて行わなかつた。その甲斐あつたか(?)、ほぼ全ての演者の方々が執筆をご快諾して下さつた。

## V. 断じて行えば鬼神も之を避く

第6巻1号の基本骨格が出来上がってきた頃には、予めお願いしておいた第6巻2号のための座長推薦演題と演者の情報が学会事務局から届き始めた。最終的に10名の演者の方に投稿原稿の執筆

をお願いすることとなつた。ここからの作業は、前述の編集作業フローチャートの流れに従い、全編集委員で作業に取りかかつた。私は、これらの原稿が将来的に呼び水となつて自由意志での投稿原稿が増えることを期待した。座長推薦演題は私の任期中に20件あつたが、結果的に18名の演者から原稿を頂くことができた。また、当初期待したごとく、これらの投稿原稿が呼び水となり、自由意志による投稿原稿も明らかに増えた。この約2年間の編集作業の過程で、私たちは非常に多くのことを学ぶこととなつた。以下にその主要な具体的事例を記す。

- 1) 投稿区分(原著、報告、資料、主張等)の定義が明確でないために、執筆者や査読者、編集委員が同じ価値観で原稿を評価できない場合が多々あつた。
- 2) 投稿規定には詳しい執筆要領が書かれているが、残念ながら送られてくる多くの原稿はそれに従い記載されていなかった。特に原稿区分の記載のないものが目立つた。
- 3) 原著の場合、査読者を2名以上と内規で決めたが、時として査読者の評価が分かれることがあつた。これも原稿区分の定義が明確でないことに由来するものと思われた。
- 4) インターネット上の画像や、書籍として市販されているアトラスなどの画像の一部を投稿原稿の図として使用されている場合があつたが、原図の所有権者からの転載許諾が得られているか否か著者に確認する必要が度々あつた。また、ネット上のイラスト(装置や機器類の画像)などは、どこまで著作権を配慮すべきか判断が難しい場合があつた。
- 5) 多くの投稿で「投稿原稿添付用紙」(著者全員が、その研究および執筆へ関与したことに同意したことを証明するもの)が添付されてなかつた。
- 6) 「寄稿」などは投稿規定の中にその原稿区分が明記されていなかった。

これらの内容は、決して著者側だけの問題ではなく、編集委員会としても改革すべきと思われる部分が少なくないと感じた。そこで、編集委員長

任期中の最後の課題として、投稿規定の抜本的な見直しをすることとした。著者(会員)の方々と査読者、そして編集委員が、同じ価値観で原稿の評価ができるように、原稿区分を明確にすると共に重要な情報はできるだけ冒頭に分かりやすく記載することを基本原則として、先ずは私が新投稿規定の草案(叩き台)を起草し、委員の先生方から忌憚のないご意見とコメントを頂きながら、約1年かけて10回以上修正を繰り返し、その最終版を平成27年の8月の理事会に審議事項として附議し、評議員会でその旨を説明した。

#### VI. 理事任期満了の5月から8月まで 編集委員長不在の問題

定款によれば理事の任期は2年で、最終年度の5月の定期総会終了時までと読み取ることができる。つまり本来であれば、平成27年5月の総会終了時点で私の編集委員長としての責務は解かれることとなる。しかし、2年前の8月末に私が編集委員長として就任した際に、その年の第5巻2号(9月1日発刊予定)の編集に苦慮した経験と、戸塚理事長から質を担保したうえで継続的な雑誌の発刊をせよとの指示で、私を含めた6名の編集委員は、5月以降も8月末まで編集委員会としての会務を継続し、第7巻2号を滞りなく9月1日に発刊した。

ここで、是非とも強調させて頂きたいことがある。理事である編集委員長が5月の理事会で解任されたとしても、運用上は編集委員長を含めた編集委員は、その年の最終号(平成27年の場合は9月1日発刊の第2号)まで責任を持って編集作業を行うように内規等に明記しておいて頂きたい。この件は、平成27年12月の理事会で審議していただくようお願いしているので、今号が発刊される頃には何らかの結論が出ているものと信じている。

#### VII. 更に質の高い雑誌刊行を目指して

平成27年7月の理事会(メール会議)で、各種委員会委員長(副委員長)ならびに部会長が選出された。冒頭でも述べたごとく、第4代目の編集委員長として松尾収二先生が、副編集委員長として嶋田かをる先生が就任され、平成27年度からは2名の理事が中心となって編集委員会の会務を運営されることが正式に決まった。ちなみに、私は大学・大学院教育部会長への就任が命ぜられた。また、私を含めた旧編集委員会の委員は新編集委員会の構成メンバーとしてそのまま留任することとなった(渡邊先生は新委員会でも副委員長となられた)。

松尾委員長と嶋田副委員長には、8月の理事会後に旧編集委員会でも実施してきた編集作業の流れをご説明させて頂いた。お二人の先生は、旧編集委員会の作業プロセスを真摯に受け止められ、その場で直ぐに改善点や基本的な作業分担等のアイデアを出された。お二人からは、より質の高い雑誌の刊行を目指した極めて精力的な姿勢を垣間見ることができ感銘を受けた。新編集委員会では旧委員会よりも更に磐石な体制が築かれ、より質の高い雑誌の発刊が実現するものと確信した。私が同年8月の理事会に審議事項として附議した新投稿規定に関しても、その後、多くの不備な点や重複した文言などを修正して頂いた。今号の巻末には、何度も校正を重ねた末に完成した新投稿規定が掲載されているはずである。会員の皆様には是非、この新しい投稿規定を熟読のうえ、本誌への積極的な投稿を切にお願いする次第である。

最後に、編集に関して素人の私を最後までサポートして下さった編集委員の方々ならびに宇宙堂八木書店の田中健治氏、そして何よりも本誌のために貴重な時間を割いて原稿を投稿して頂いた全ての著者の方々とその原稿を査読して下さった査読者の方々に心から感謝の意を表したい。



